

# 江戸東京語における自称オレの女性忌避

神 戸 和 昭

## 0. 本稿のねらい

人称代名詞オレは、歴史的には対称にも用いられ、上代から中世にかけて用例を見るが、本稿では、院政・鎌倉期に現れ、以後現代にまで連続としてつながる「自称のオレ」を問題にする。自称オレを細かく見れば、語史的になお不明の点が多い。特に今回は、江戸東京語における自称オレの女性忌避の要因を探ることに主眼を置く。

なお、調査資料の各使用テキストについては、稿末に一括して掲げる。引用に際しては、適宜、論旨に支障のない範囲で表記を改めたり、〔 〕（亀甲括弧）内に引用者による補注を施したりしたことがある。

## 1. 江戸東京語におけるオレ系自称変遷の概況

本論に入る前に、江戸東京語におけるオレ系自称——語形と待遇価値とが互いに類似する、オレ・オラ・オイラ 3 語の総称——の変遷の概略について、小松寿雄の一連の研究を中心に、ここで簡単に確認しておきたい。

### 1-1. 明和期の状況

まず、直接資料によって体系的に把握できる最古の江戸語——江戸語記述の出発点——と言われる明和期（1764-72）江戸語の状況については、小松（1985）に、洒落本を具体的に調査した報告があり、明和期には、オレ系自称が一般的に用いられていたことが分かる。もっとも、洒落本には普通の素人女性が登場しないという内容上の制約があるが、その欠は咄本（断本）で補える。洒落本に比して咄本は、概して、描写のシャープさや 1 話ごとの言語量の点で劣るが、作品全体としての登場人物の多彩さで優る。ただ、いわゆる江戸小咄本で明和期の作品は少なく、江戸小咄本の祖とされる木室卯雲『鹿の子餅』でさえ、かろうじて明和末年の明和 9 年＝安永元年（1772）刊である。ために、次の安永期のものが中心とならざるを得ないが、わずか数年ほどの違いであれば、事実上大きな問題はなかるう。例えば、来風山人序『鳥の町』（安永 5 年＝1776）には、次のような、姑の嫁に対する会話中にオレの使用例が見える。

町内からよりあい寄合を触れてくる。〈中略〉「おれがうち内に居るに、何でもおれには秘し隠しにする。何の寄合じや」（「嫁姑」武藤1987:351頁）

彼女たちの階層を示すものは直接明記されていないものの、「寄合」（町内集会）を手がかりに考えると、上層ないし中層上位の町人女性ではないかと推測される。近世、

町役の負担は町屋敷の所持者である家持・地主が、屋敷地の規模（間口規模の場合が多い）に応じて行い、彼らが町政の運営主体であったので、家持・地主を本町人と称することもある。しかし、十七世紀後半以降、富裕商人による町屋敷の集積が進展していくと、地主から屋敷地の管理を任された家守が町政運営の主体となっていった。（加藤1993:42頁）

とあるように、町役を務める義務と町政に参画する権利を有する町人は「本町人」と呼ばれる、言わば特権的市民層で、本来は家持・地主層〔＝上層〕がこれに属していたが、次第に家守（大家）〔＝中層上位〕の力が増大し、これも本町人に準じて扱われるようになったという。

### 1-2. 文化期の状況

次に、文化期（1804-18）の状況に目を転じてみよう。式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』（文化6年-10年＝1809-13）を精査した結果を載せる小松（1987・1999・2000）の記述を総合すれば、罵りのような場面を除くと、男性町人は年齢・階層を問わずオレ系を用いているのに対し、女性町人でオレ系を使用するのは中層下位と下層の一般成人女性、玄人筋の女性、（下層の）女兒の場合に限られ、上層・中層上位の一般成人女性はオレ系を使用しない。よって、「オレ系自称の忌避は中層〔上位〕以上の女性に既に始まっている」（小松1999:184頁）と結論する。

また、三馬の戯作を中心資料に、文化期を主とする江戸町人成人男性の待遇表現体系をまとめた山崎久之（1990）の「対応一覧表」（262-264頁）を参照してみると、自称オレは、第1段階（最高敬語）にこそ現れないが、第2段階（普通敬語）から第5段階（ののしり）まで広く分布している。山崎には文化期江戸町人成人女性の場合が取り上げられていないが、『浮世風呂』を調査した小松（1999）には、「下層成人女性の使用人称のまとめ」として、オレ系自称が対等・目下に対するものとされている（184頁）。小松のここで言う「対等」「目下」は、山崎の「第3段階」「第4段階」にほぼ相当すると考えられる。

これらの調査結果を総合すれば、文化期江戸成人町人におけるオレ系自称は、男性は階層に関わりなく使用されるのに対し、女性は中層上位以上の者の使用が見られず、待遇の点でも女性使用の方には価値の下落が認められるなど、階層の点でも待遇価値の点においても女性のオレ系自称には、その使用範囲縮小のきざしが認められるのである。

### 1-3. 天保期の状況

その後の天保期（1830-44）を中心とする様子については、人情本を調査した小松（1961）が、「遊女、芸妓、下級町人女性は「おれ・おいら」の使用に関して、男と変らない。

上級町人女性には、「おれ・おいら」をさける傾向が強い。おそらく武家の女の場合も同じだろう」(114頁)とする。基本的に、文化期の傾向を受け継ぐものと言えるだろう。

#### 1-4. 幕末期の状況

さらに、幕末期(1853-1868)の状況を見てみよう。江戸時代も終末の時期にあたる1860年代の資料——洋学資料3種と幕末期人情本1種——を調べた小松(2007)の報告によれば、「オレ・オイラの女性の使用が非常に少なくなっており、人称組織にオレ、オイラのような新しい男性語が生まれようとしている。明治東京語の一特徴が形成されつつあるとみられる」(28頁)という。階層を問わず、女性がオレ系自称を使わない傾向が顕著になっていることが分かる。

#### 1-5. 明治期の状況

明治東京語の様子については、小説類を調査した小松(2000)がある。これによれば、下層の一般女性、玄人筋の女性、女兒のいずれの場合も、もはや自称としてオレ系を使っておらず、「東京語の女性自称としては、オレ系がほとんど消えてしまう」(2頁)状況にあるという。

#### 1-6. まとめ

以上、主として小松寿雄の一連の研究報告に拠りながら、江戸東京語におけるオレ系自称の変遷をたどってきた。今、それを簡潔にまとめ直せば、およそ次のようになろう。

オレ系自称の忌避は文化期、中層上位以上の女性に認められる。幕末期にはオレ系の女性使用は非常に少なくなり、明治東京語では女性の自称としてオレ系は殆ど姿を消すに至る。この結果、オレ系自称は男性語化し、人称組織に新たな変革がもたらされた。

### 2. オレ系自称の個別的使用の変遷

冒頭で述べたように、自称代名詞オレ・オラ・オイラの3語は、語形が互いに類似し、その待遇価値にも積極的な相違を見出しがたい。一括して「オレ系」自称と称される所以である。実際、式亭三馬の滑稽本『浮世床』(文化10-11年=1813-14)には、

短「おいらも能伯母<sup>い</sup>さまが欲<sup>ほ</sup>しい。おらが伯母<sup>をば</sup>御<sup>ご</sup>などは不仕合<sup>ふしあはせ</sup>で独身<sup>ひとりみ</sup>になつ居<sup>て</sup>るからおれがはごくむ〔=面倒ヲミル〕のだ。(初編巻之下、中西1955:148頁)

のように、この3者が連続して現れる箇所がある。これは確かに、オレ系自称相互の関係の近さ、同類性を物語る恰好の実例と言えよう。さらに、言語記述の上でも、オレ系という括りは、例えば、江戸東京語の自称代名詞の変遷を、

オレ系自称：男女共用→女性使用忌避(上層→下層)→男性語化=一般男性専用自称の誕生→それも最終的にはオレだけが残る

と、体系的な大きな流れの中で図式的に説明するような際に大変有効な枠組であること、先に具体的に概観してきた通りである。

しかし、細かく見るなら、オレ・オラ・オイラ3語が共存していた状況のもとでは、これらの間に、当然、何らかの相違があったはずである。単純な理屈の上から言っても、全く等価ということはありません。先行研究において、この3者の相違を具体的に問題にしているものはあまり多くない。その中で、江湖山恒明(1944)は『浮世床』の調査により、これらの間に待遇価値の違いを認め、それは、オレ>オイラ>オラの順だという。ところが、上掲の『浮世床』におけるオレ系自称3語近接使用の実例などを見ると、直ちにそれら3者間に積極的な待遇的差異を見出すのは難しい。事実、江湖山以外で、明確に3語間の待遇価値の相違を主張する者はいないようで、たとえ3者間に何らかの待遇価値の違いがあったとしても、それは極微なものにとどまると言う外ない。むしろ、待遇価値以外の面からオレ系自称3語間の具体的な相違点を探っていく方が、より生産的な態度だろう。

### 2-1. 文化期の用法

早速、実際の材料をもとに考えていこう。初めに、すでに名前の挙がっている文化期の『浮世床』を取り上げ、そのオレ系自称3語の用法の詳細を調べた結果を見てみたい。

【表1】『浮世床』オレ系自称の用法

	+ア(長音)	+ガ(主格)	+ガ(連体)	左記以外	計
オレ	0	30	6	48	84
オラ	19	0	24	1	44
オイラ	3	0	4	9	16

※オレにはオレラ・オレサマの各1例を含む。上方者・上方歌舞伎、いちこの口寄せの台詞、曲名、および左ルビの傍注的部分は含まず。

表1の通り、オイラはオレ・オラに比して使用数がかなり少ないため、一まず置いて、オレ・オラ2者の用法を比較してみると、両者でその用法は大きく異なっている。オラの方は全44例中、「左記以外」に分類した副助詞モを後接する唯1例を除いて、他はすべて、オラア(オラー)と長音化するか連体助詞ガが後接するものに限られる。対して、オレの方は全84例中、連体助詞ガが後接するものは6例のみで全体の1割に満たず(7.1%)、残りは、オラの方には殆どあるいは全く見られなかった、主格助詞ガが後接するか「左記以外」のものばかりである。

このように、オレとオラには、いわゆる相補分布に近い用法分担が見られるのである。その意味で、オラはオレの一種の異形態と見なすことが出来る。とすれば、当時の意識としても、オレとオラとは別語ではなく本来同じ語で、オレが用法によってたまたまオラという形(共時的に見れば母音交替形)になって現れたに過ぎないと考えられていた可能性が、新たに浮上してくる。

より分析的に言えば、オラの長音化形オラーは、オレワ→オレア→オラア（オラー）という音転（半母音wの脱落および母音の逆行同化）の結果、また、オラガの方も、オレガ→オラガという音転（母音の逆行同化）の結果、それぞれ生じた転訛形と解され得る。このような、音変化の道筋が具体的に立てられることも、オラがオレの転訛形である可能性を支持する。

このことに関して、当時の語源意識の面からも、さらに考えてみよう。文化期より前のものになるが、全国方言書の嚆矢として知られる越谷吾山『物類称呼』（安永4年=1775）には、

○自<sup>みづから</sup>をさしていふ詞にく中略>おれと云<sup>おのれ</sup>おらといふは己の転語にて諸国の通称か  
（巻之五「言語」、東條1941:145頁）

とあり、また『浮世床』と年代的に重なる、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』（享和2-文化11年=1802-14）には、

○うらといふは、我等<sup>われら</sup>の転語<sup>てんご</sup>おれらをちぢめておらといひ、おら又<sup>てん</sup>転じてうらといふ  
（二編上「道中膝栗毛後編凡例」、麻生1958:85頁）

とある。これらに示された、オノレ→オレ／オラ、あるいは、ワレラ→オレラ→オラ（→ウラ）という音転説自体の当否はさて置き、いずれの場合からも、当時、オレとオラとが同源であるという語意識が明確に存したことが分かる。ちなみに、上記の中で、オイラについては一切触れられていない点も注目される。このことから、一まとまりに扱われているオレ・オラとそこから外れるオイラとの間は、当時、ある距離を持って意識されていたらしいことも窺える。

『浮世床』のオイラの用法を表1により確認してみると、用例数が少ないためもあるが、用法分布上の特徴が今一つはっきりと見えてこない憾みがあるものの、少なくとも、オレと相補分布を形成していないことは確かである。オイラの用法がオレ・オラとは独立した分布傾向を見せることは、オイラが、オレ・オラとは異なる何らかの独自の性格を有することを物語る。

以上、『浮世床』の用法の具体的データ、および当時の語源意識を検討した結果、オラがオレの一種の異形態（転訛形）として同語と意識されていた可能性の高いこと、同時に、オイラがオレ・オラとは何らかの異質性を有し、ある距離をもって捉えられていたと見られることを述べた。

## 2-2. 天保期の用法

その後の天保期の作品の傾向はどうか。例えば、為永春水の人情本『春色辰巳園』（天保4-6年=1833-35）におけるオレ系自称3語の用法を見てみると、表2のように、オラの衰退とオイラの堅調ぶりが顕著である。

【表2】『春色辰巳園』オレ系自称の用法

	+ア(長音)	+ガ(主格)	+ガ(連体)	左記以外	計
オレ	0	31	10	32	73
オラ	14	0	0	0	14
オイラ	11	7	1	31	50

※オイラにはオイラタチの2例を含む。

オラは、使用総数においても、用法の限定化（長音化形のみ）の点においても、退潮が著しい。しかし、ここでも、オレとオラの用法が相補分布を成している点は依然として変わりなく、やはり、オラはオレの異形態（転訛形）の位置にあることが明らかである。このことはまた、文化期の『浮世床』に現れた、オレとオラの用法における相補分布的傾向が、決して偶発的要因による個別的な現象ではないことの1つの証と言えよう。そして、オラがオレの用法を補完するための存在という、その有りようは、天保期の本作品では、さらに徹底していることも注目される。すなわち、当作品では、オラは、オレの担わない長音化形（オラー）のためだけに奉仕する、全くの補助的存在と完全に成り下がっているのである。オイラの用法に関しても、『浮世床』の場合と同様、オレ・オラとは独立した別個の分布を示している点で、やはり異質な傾向を見せる。

なお、天保期人情本あたりから、オレ系自称に助詞ノが後接する例がかなり目立ち始める。とりわけ、オイラに後接する連体助詞ノの進出ぶりが際立つ。『春色辰巳園』におけるオレ系自称の「+ガノ(連体)」の使用回数をまとめてみると、表3の通りとなる。

【表3】『春色辰巳園』におけるオレ系自称「+ガノ(連体)」

	オレ	オラ	オイラ
+ガ(連体)	10	0	1
+ノ(連体)	1	0	7

（連体用法自体が見えないオラは別として）オレの方はなお連体助詞ガ後接が殆どであるのに対し、オイラの方はすでにノ後接が主流となっており、両者著しい対照を見せる。このように、オイラは連体助詞ノとの強い親和性を示すのである。

### 2-3. 幕末期の用法

それが、幕末期人情本の山々亭有人『春色恋廻染分解』（万延元-慶応元年=1860-65）になると、表4のように、オラ衰退の傾向はさらに甚だしく、まことに目を覆わんばかりの惨状である。



【表4】『春色恋廻染分解』オレ系自称の用法

	+ア(長音)	+ガ(主格)	+ガ(連体)	左記以外	計
オレ	0	13	4	33	50
オラ	0	0	0	2	2
オイラ	0	7	0	32	39

天保期の『春色辰巳園』において、唯一オラの存在理由とも言えた長音化形オラーまでもが、完全に消滅している。天保期にはまだ見られた、オイラの長音化形オイラーの方も完全に姿を消しているところを見ると、この時期の人情本では、オレ系自称の長音化現象の存在自体、もはや見出すことが非常に困難な状況にあったのであろう。かくして、オラの最後の牙城とも言うべき長音化形消滅の時を以て、江戸語におけるオラの寿命も、事実上尽きるに至ったと見ることが出来る。そして、この後、オラが使用されることがあったとしても、それは(標準的な江戸東京語ではなく)野卑な田舎詞的ニュアンスを帯びたものとして次第に認識されていったものと思われる。ただし、この点に関しては、今後さらに検討していく必要がある。

オレは(その存在自体見出すことが非常に困難な状況にあった長音化形を除けば)すべての用法にわたっているのに対し、オイラには連体助詞ガが後接する例が見えない点で、両者の用法は異なっている。

【表5】『春色恋廻染分解』におけるオレ系自称「+ガ/ノ(連体)」

	オレ	オラ	オイラ
+ガ(連体)	4	0	0
+ノ(連体)	8	0	7

天保期の『春色辰巳園』の時と同様、『春色恋廻染分解』におけるオレ系自称の「+ガ/ノ(連体)」の使用回数を見てみると、表5の通り、(やはり連体用法自体が見えないオラは別として)、オイラの方は体言に連なる際はすべて連体助詞ノを後接し、ガを従える例はもはや全く見られない。オレの方も、天保期に比してノを後接する例の増加が顕著ではあるが、それでもなお、ガを従えた例もノ後接の場合の半数残っており、『春色辰巳園』と同じく、本作品においても、オイラの方に連体助詞ノとのより強い親和性が認められることが注意される。

### 3. オレの女性忌避

従来、女性のオレ忌避の要因として、よく言われてきたのは、自称オレが粗野・下品な語感を持っていたため、女性の上品な言葉への志向の強まりという流れの中で、オレが女性によって忌避されていった、というような説明である。おそらく、その説明は大筋において間違っていないであろう。

ちなみに、前章で、オレとオイラとを比べた場合、連体助詞におけるガ→ノという近代

語の大きな流れの中で、オイラの方が連体助詞ノとの親和性がより強い——裏から言えば、オレの方が連体助詞ガをなお存続させようとする性質がより強い——傾向があることを指摘した。山崎久之（2004）によれば、古く「[の]は尊敬の意、「が」には卑しめる意があると言われるが、当期〔=近世前期（上方）〕の「の」「が」にはそのような表現価値は存在しないことは明らかで」（472頁）、その連体用法には、

の 品のある語、きれいな語感のある語。  
が 反上品語、品の劣る語。（477頁）

という、品格の相違があるという。仮に近世後期江戸語にもこの観点を導入した場合、連体助詞ノとの親和性がより強いオイラよりも、連体助詞ガをなお存続させようとする性質がより強いオレの方に、下品な語感が強かったことになる。とすれば、これは上述した、女性のオレ忌避の要因に関する、オレが粗野・下品な語感を持っていたためとする従来の説明を補強する材料たり得るものと、一応言えるだろう。

しかし、ならば何故、オレが粗野・下品な語感を持っていたのかが、さらに説明される必要がある。これが問題点の第1である。近世前期（上方語）においては、「上は大名から下郎まで、大名の後室・妻・姫から遊女・町娘まで、男女高下広く用いられ」（湯澤1936:37頁）、待遇価値の点でも、男女ともに、敬意最高位を除く全段階を覆い、目上にも目下にも用いられていた（山崎前掲:312-315, 324-326頁）とされる存在で、自称オレはあったのである。そのようなオレが、なぜ近世後期に入り、にわか粗野・下品な語感を帯びるようになっていったのか、その要因についてぜひとも合理的な説明が求められるところである。

また、従来の説明では、しばしば、オレ自体とオレ系自称3語との区別をあいまいにしたまま議論が進められてきたように見受けられる。これが問題点の第2である。やはり前章において、オレ系自称3語がその用法上、オレ（・オラ）対オイラに2分され得ることを述べたが、ここで改めてその要点を整理すれば、次のようになる。

すなわち、オラは、基本的にオレの異形態（転訛形）として位置づけられるが、その補助的存在という地位の脆弱さに伴って漸弱の傾向が進み、幕末期には事実上その勢力を失う。対して、オイラは、オレとは異なる独自の性質を有するため、幕末期に至ってもなお勢力を保ち、むしろ、オレ系自称がオレ対オイラという単純な2項的対立に変貌していった結果、相対的にその存在が際立つようになった。つまり、オレ系自称3語は相異なる振る舞いを見せる存在であり、大きくは、オレ（・オラ）とオイラとに2分して別個に考察する必要があるということになる。そのため本稿では、論点を明確にすべく、オレ（・オラ）に限定して女性忌避に関する考察を進めていこうとするものである。

### 3-1. 大田南畝の証言

女性のオレ忌避の要因をさらに深く探っていく上で、1つの重要な手がかりとなると思われるのが、次の大田南畝の証言である。そのタイトルにある「変通軽井茶話」とは、酒



落本『道中粹語録』（安永末年＝1781頃）の別名である。

へんつうかる み ぎ はのじよ  
 変通軽井茶話序  
 がくしや そつ か おやしき きでん きやん つう いづ  
 学者の足下、藩中の貴殿、俠者のおみさん、通のぬし、何れもきさまはきさまなり。  
 へんぼう ふねい  
 その返報に不佞といひ、身どもといひ、おれがといひ、わつちといふ。いづれも拙者  
 せつしや  
 は拙者なり。（水野1958:320頁）

この一節は、当時の江戸語における、言語使用者の職業・階層による人称代名詞（対称と自称）の相違に言及したものである。よく引かれるものでもあり、改めて説明は不要と思われるが、これをより見やすく表の形にまとめれば、表6ようになる。

【表6】「変通軽井茶話序」が言及する江戸語の人称代名詞と階層

使用者層	学 者	武 士	俠 者	通 人
対称代名詞	足 下	貴 殿	おみさん	ぬ し
自称代名詞	不 佞	身 ども	お れ	わ っち

大田南畝（寛延2-文政6年＝1749-1823）は、御家人で当代随一の知識人・文人として知られる。文学史的には、江戸文壇草創期のリーダー格、大立者的存在として活躍した人物である。上掲の記述は、世態風俗万般に通じた江戸の教養ある武士が、江戸語の多様な階層性の実態を象徴的に例示した貴重な証言と言える。その中で南畝が、自称オレを「俠者」の自称と言い切っているのである。言うまでもなく、オレは、決して俠者の類だけが用いた自称ではないが、当時の社会の表裏に精通した知識人が、「オレ＝俠者の自称」と明確に認識していたという、その強い語意識の存在をここでは特に重視したい。

### 3-2. 『俠者方言』の自称

では、当時の俠者たちが実際どのような自称を使っていたのだろうか。俠者の言語を活写した異色の洒落本『俠者方言』（明和8年＝1771）を調べてみよう。まず、簡単に自称代名詞の使用総数を示す。

オレ（22例） オラ（19例） オイラ（8例） ワシ（6例） ワタシ（1例）

※オレにはオレサマの1例、ワシにはワシラの2例をそれぞれ含む。割注中の説明部分の例は含まず。

このうち、ワタシは親分の女房が使用したもので、ワシは子分の俠者と「勝手ノ者」が使用したもので、このワタシ・ワシともに全例が俠者の親分（目上）に対して使用されている（このワタシ・ワシを、仮にワタシ系自称と呼ぼう）。一方、オレ系自称の方は、子分の俠者同士（同等）か親分が子分（目下）に対して用いている点で、その待遇価値が、ワタシ系自称（目上）対オレ系自称（同等以下）と、大きく2分される。さらに、表7により、オレ系3語の用法を詳しく見てみると、一見して、文化期の『浮世床』の傾向（表1）

に酷似している様が見えはつきりと窺える。

【表7】『狭者方言』オレ系自称の用法

	+ア(長音)	+ガ(主格)	+ガ(連体)	左記以外	計
オレ	0	12	1	9	22
オラ	12	0	7	0	19
オイラ	0	4	1	3	8

※オレにはオレサマの1例を含む。オイラのうち6例は複数の用法。割注中の解説的部分の例は含まず。

すなわち、オラは長音化形と連体助詞ガ後接のものに集中する一方、オレは主格助詞ガ後接か「左記以外」の用法のものが大半をしめていて、やはり両者、相補分布に近い用法上の偏りを見せる。オイラが、オレ・オラに比して使用数がかなり少なく、しかも、オレとは相補的分布を形成していない点も、『浮世床』と同断である。

### 3-3. 他作品の状況

『狭者方言』と同じ明和期(1764-72)の、他の作品における状況はどうであろうか。結論を先に言えば、当期の他の洒落本『郭中奇譚』(明和6年=1769)『遊子方言』『辰巳之園』(以上同7年=1770)3作品を調べてみたところ、『狭者方言』とはその様相が大きく異なるものであった。例えば、オラの長音化形オラーは、他の3作品には一切出てこない。『遊子方言』を例にとれば、この作品には、5例のオラ+ガ(連体)の実例が見えるのに、長音化形オラーは全く見られない。これは、明和の一般の洒落本においては、江戸語の特色の1つと言われる音節の融合・転化現象自体がまだ不活発なためと思われる。咄本に目を向けてみると、明和9年(1772)刊『鹿の子餅』には、3例のオラ中1例がオラーという長音化形で現れる。しかし、この長音化形の話し手は「野等息子」(武藤1987:58頁)すなわち道楽息子・放蕩息子で、芝居の『義経千本桜』に出てくる典型的な不良息子・ごろつきの「いがみの権太」を思わせるような存在という設定になっている。つまり、「狭者」気取りの不良息子に相応しい物言いとして長音化形オラーが採用されているわけで、逆に言えば、当時、オラーという長音化形がまだ堅気の一般人たちにはあまり使われていなかったことを、この例は暗示する。事実、『鹿の子餅』と同年刊の咄本『楽牽頭』のオレ系自称を見ると、長音化形は全く現れない。

体系的な調査をしたわけではないが、次の安永期(1772-81)以降、一般人(江戸者)と思われる人物が長音化形オラーを使用した例が見えるようになる。しかし、しばらくは概して散発的な出現にとどまり、それが顕著になるのは、享和期(1801-04)ないし文化期(1804-1818)——享和はわずか4年目にして文化に改元されるので、大きく文化期頃と一まとめにして言ってもよいだろう——すなわち19世紀初頭あたりまで降るようである。一例として、『東海道中膝栗毛』(享和2-文化11年=1802-14)における主人公、弥次・北両人の使用するオレ系自称を調べると、オラ全38例中32例までが長音化形オラーで現れる(オレの方には長音化形は一切出現しない)。

小松（1985）によれば、『俠者方言』に描かれた俠者たちの言語事象は、種々の面において一般的变化を先取りしており、アイ→エーなる連母音アイの融合化現象を例にとれば、文化期（の下層）の傾向に近いという。オレ系自称3語の使用状況も、すでに見たように文化期の『浮世床』に酷似した様相を示しており、この点でも、やはり文化期を先取りした傾向を見せていることになる。

結局、明和期の俠者間の自称としては、目上に対してはワシ、同等以下に対してはオレ系がもっぱら使用されるが、オレ系自称全49例中オレ（およびその異形態オラ）が41例までをしめ、オレが俠者の自称を代表する語であることは間違いない。その意味で、大田南畝の証言と符号する。さらに言えば、俠者以外も現実にはオレを使用するにも拘わらず、南畝が特に「オレ＝俠者の自称」と明言したのは、俠者以外はオレ系以外の自称も用いて使い分けを行っているのに対し、俠者は（親分に対するような場合は別として）殆どオレのみを用い、オレが俠者の自称のシンボリック的存在であった事情によるものと思われる。

しかし、以上の検討の結果を総合して改めて考え直せば、南畝が「オレ＝俠者の自称」と明言したことの真の意味は、単にオレ（およびその異形態オラ）が俠者によって多用されているという表面的な使用頻度だけの問題なのではなく、当時の俠者社会における、一般社会とは異なるその独自の用法——具体的には、（オレの異形態である）オラの長音化形オラーの頻繁な使用——の面をも含めての謂いであった、と解することが出来るだろう。

### 3-4. オレ女性忌避の要因

「オレ＝俠者の自称」という語意識の存在は、当時、ひとり南畝だけのものではなかったであろう。小松（1985）の言うように、一般に、男性は反社会的・反規範的なものにも独自の価値を見出し得るのに対して、女性は必ずしもそうではなく、特に上層の女性ほど、その種の傾向が強い。オレが反社会的存在である俠者の使用する反規範的な自称、という意識が働いている中で、文化期には上層（および中層上位）の女性がオレを忌避するようになり、次第に、より下位の女性たちがそれに追隨していったものと思われる。しかし、「オレ＝俠者の自称」という語意識がオレ女性忌避の要因であるなら、その先鞭をつけるべき上層の女性たちが、なぜ文化期までその時期を待ったのかが説明されなければならないであろう。

それは、おそらく、前節末で指摘した「オレ＝俠者の自称」ということの真の意味、つまり、単にオレが俠者によって多用されているという表面的な使用頻度だけの問題なのではなく、当時の俠者社会における、一般社会とは異なるその独自の用法——具体的には、（オレの異形態である）オラの長音化形オラーの頻繁な使用——の面をも含めての謂いであったこと、と関係がある。俠者以外の一般人において、長音化形オラーの使用が顕著になるのは文化期頃であると思われることは、これまたすでに述べた。比喩的な言い方をすれば、この頃になって、ようやく一般人のオレ（・オラ）の使用傾向が俠者に追いついたのである。とすれば、「俠者の自称」という意識がずっと底流していたオレを、名実ともに一般人も使用するようになった文化期を迎えて、オレ（・オラ）という反規範的な物言いに対する上層女性の嫌悪の情が覆いがたいほど増大し、もはや限界を超えるにまで至っ

たことが、当期に上層女性たちがオレ（・オラ）を強く忌避するようになった直接の動因であったと推測される。

さらに、「化政期には言葉に対する意識の面でも、上層と下層の対立が顕在化する」（小松前掲:96頁）と言われるが、階層的対立意識先鋭化という当時の社会構造にわたるより根底的・一般的な問題も、当然その背景にあったものと考えられるのである。

#### 4. おわりに

最後に、そもそも、俠者がみずからの代表的自称としてオレを選択した理由について、私見の一斑を述べ、稿を閉じることにしたい。

その問題は、明和期を溯る江戸俠者の言葉の実態を示す直接資料を欠くため、推測の域にとどまらざるを得ないが、（オイラに比して）オレに自尊的ニュアンスが強かったと思われることと関わっているのではないか。俠者の常用する自称には、気負いや粋がりなどその強烈な自意識を表現し得る、自尊的ニュアンスを強く持ったオレこそが相応しい。そして、さらに言えば、それは自称オレの語源——現在一般に、オノレ（己）であるとされる——とも関係することであろう。

上来、オレ系自称のうちオレ（・オラ）を中心に、女性忌避の要因を探ることを主眼に論を展開してきた。オレ（・オラ）とは相異なる振る舞いを示すオイラの語性についての具体的考察は、簡単に触れるだけで終わったオレの自尊的ニュアンスの問題とも絡め、引き続き別稿にて詳述する予定である。

#### 【使用テキスト】

〔洒落本〕郭中奇譚水野他1979a:早稲田大学図書館（宮川曼魚旧蔵）本と照合。遊子方言水野1958:同前と照合。辰巳之園水野1958:同前と照合。俠者方言水野他1979b:東京大学文学部国語研究室蔵本と照合。道中粹語録水野1958:東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本と照合。〔断本〕栞牽頭武藤1987:同前と照合。鹿の子餅武藤1987:武藤1976影印本と照合。鳥の町武藤1987:同前と照合。〔滑稽本〕東海道中膝栗毛麻生1958:今井1983複製本と照合。浮世床中西1955:故吉田幸一蔵本と照合、検索に稲垣・山口1983を利用。〔人情本〕春色辰巳園中村1962:小松寿雄蔵本と照合。春色恋廻染分解浅川2012:東京大学総合図書館（青洲文庫旧蔵）本と照合、検索に浅川2012を利用。〔言語〕物類称呼東條1941:早稲田大学図書館蔵本と照合。

#### 【主要参考文献】

浅川哲也編著（2012）『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』おうふう  
麻生磯次校注（1958）『日本古典文学大系62 東海道中膝栗毛』岩波書店  
稲垣正幸・山口豊編（1983）『柳髮新話 浮世床総索引』武蔵野書院  
今井有雄解説（1983）『東海道中膝栗毛』（全18冊）日本文化資料センター  
江湖山恒明（1943/1985）「自称代名詞「おれ」の系譜」『國語攷』笠間書院  
———（1944）「江戸語に於ける待遇法—浮世床に現れた第一第二人称待遇法について—」久松潜一編『日本文学史論—小説篇—』至文堂（原論文未見。小松1966の紹介に拠る。）  
加藤 貴（1993）「屋敷地」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典14』吉川弘文館

- 小松寿雄 (1961) 「人情本の待遇表現」『国語と国文学』38-4  
 ——— (1966) 「江戸小説における敬語—浮世風呂・浮世床について—」『国文学解釈と教材の研究』11-8  
 ——— (1985) 『江戸時代の国語 江戸語—その形成と階層—』東京堂出版  
 ——— (1987) 「浮世風呂における女性の人称と階層」近代語学会編『近代語研究7』武蔵野書院  
 ——— (1999) 「浮世風呂における人称の階層差と男女差」近代語学会編『近代語研究10』武蔵野書院  
 ——— (2000) 「オレ・ソチ・ソナタ・ワッチ・ワタイ—明治東京語女性人称形成の一考察」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究19』和泉書院  
 ——— (2007) 「幕末江戸語の一・二人称代名詞」『学苑』802
- 東條 操校訂 (1941) 『物類称呼』岩波書店
- 中西善三校註 (1955) 『日本古典全書69 浮世床』朝日新聞社
- 中村幸彦校註 (1962) 『日本古典文学大系64 春色梅児誉美』岩波書店
- 水野 稔校註 (1958) 『日本古典文学大系59 黄表紙・洒落本集』岩波書店  
 ———ほか編 (1979 a) 『洒落本大成4』中央公論社  
 ———ほか編 (1979 b) 『洒落本大成5』中央公論社
- 武藤禎夫解題 (1976) 『大東急記念文庫 善本叢刊6 嘶本集』汲古書院  
 ———校註 (1987) 『安永期小咄集—近世笑話集(中)—』岩波書店
- 山崎久之 (1990) 『続 国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院  
 ——— (2004) 『増補補訂版 国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院
- 湯澤幸吉郎 (1936) 『徳川時代言語の研究 上方篇』刀江書院  
 ——— (1957) 『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

**【付記】** 本稿は、「オレって何者?—江戸語におけるオレ系自称3語相互の位置づけ—」と題し、近代語学会(2012.12.15、於白百合女子大学)において発表した内容の一部に基づく。席上、浅川哲也・田中章夫・土屋信一・新野直哉・矢鳥正浩(五十音順)の諸氏から貴重なご指摘を賜ったが、それらを必ずしも本稿に反映させられなかったことを遺憾とする。

(ごうど・かずあき 千葉大学文学部)